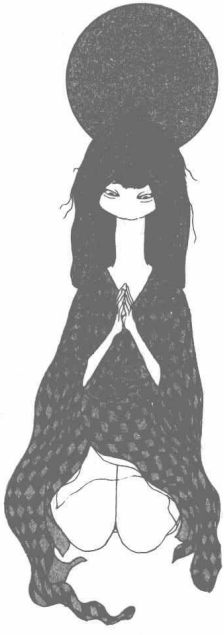
夢野久作全集

7

三一書房版

夢野久作全集



三一書房

夢野久作全集7　一九七〇年一月三十一日　第一版第一刷発行
一九七四年六月三　十日　第一版第三刷発行

編者　中島河太郎・谷川健一　©杉山龍丸　一九七〇年
発行者　竹村　一　発行所　株式会社三一書房　東京都千代田区神田駿河台二の九
郵便番号一〇一　電話東京（二九一）三一三一～五番　振替東京八四一六〇番
印刷所　暁印刷株式会社　製本所　株式会社鈴木製本所

目次

近世快人伝　7
父杉山茂丸を語る　81
白髪小僧　93
鼻の表現　187
呑仙士　258
ビール会社征伐　261
月蝕　264
童話　267
探偵小説の正体　361
探偵小説の真使命　365
甲賀三郎氏に答う　369
探偵小説漫想　374
線路　376
ざんげの塔　379

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

怪青年モセイ　382
塵　384
路傍の木乃伊　387
スランプ　390
お茶の湯満腹談　393
私の好きな読みもの　396
創作人物の名前について　398
恐ろしい東京　404
古い日記の中から　407
「生活」＋「戦争」＋「競技」÷0＝能　408
能とは何か　412
実さんの精神分析　446
道成寺不見記　451
猟奇歌　454

良心・第一義 476
解題（中島河太郎） 477
解説対談（杉山クラ・杉山龍丸×谷川健一） 481
年譜・執筆目録（中島河太郎） 495

夢野久作全集7

近世快人伝

まえがき

筆者の記憶に残っている変った人物を挙げよ……と言う当代一流の尖端雑誌「新青年」子の注文である。もちろん「新青年」の事だから、郵便切手に残るような英傑の立志談でもあるまいし、神経衰弱式な忠臣孝子の列伝でもあるまいと思って、なるべく若い人達のお手本になりそうにない、処世方針の参考になんか絶対になりっこない奇人快人の露店を披(ひら)く事にした。

とは言え、何しろ相手が了簡のわからない奇人快人揃いの事だからウッカリした事を発表したら何をされるかわからない。「新青年」子もコッチがなぐられるような事は書かないでくれと言う但書を付けたものであるが、これは但書を付ける方が無理だ。奇行が相手の天性なら、それを書きたいのがこっちの生まれ付きだから是非もない。サイドカーと広告球(アドバルン)を衝突させたがる人間の多い世の中である。お互いに運の尽きと諦めるさ。

頭山満

ナアーンダ。奇人快人と言うから、どんな珍物が出て来るかと思ったら頭山先生が出て来た。第一あんまり有名過ぎるじゃないか。あんなのを奇人快人の店に並べる手はない。明治史の裡面に蟠踞する浪人界の巨頭じゃないか。維新後の政界の力石じゃないか。歴代内閣の総理大臣で、この先生にジロリと睨まれて縮み上らなかった者は一人もいない偉人じゃないか……とか何とか文句を言う者が大多数であろう。

……怪しからん。頭山先生を雑誌の晒し物にするとは不埒な奴じゃ。頭山先生は現代の聖人、昭和維新の原動力だ。そんな無礼な奴は絞め上げるがヨカ……とか何とか腕まくりをして来る黒切符組もないとは限らないが、まあまあ待ったり、話せばわかる。

筆者のお眼にかかった頭山先生は、御自身で、御自身を現代の聖人とも、昭和維新の原動力とも、何とも思って御

座らぬ。「俺は若い時分にチットばかり、漢学を習うたダケで、世間の奴のように、骨を折って修養なぞした事はない。一向ツマラヌ芸なし猿じゃ」と自分でも言うて御座る。それでいて西郷隆盛の所謂、生命も要らず、名も要らず、金も官位も要らぬ九州浪人や、好漢安永氏の所謂「頭山先生の命令とあれば火の柱にでも登る」というニトロ・グリセリン性の青年連に尻を押されて、新興日本の尻を押し通して御座った……しかも一寸一刻も、寝ても醒めても押し外した事はなかった。日本民族をして日清、日露の国難を押し通させて、今は又、昭和維新の熱病にかかりかけている日本を、そのまんま、一九三五年の非常時の火の雨の中に押し出そうとして御座る。……ように見えるが、その実、御自身ではドウ思って御座るかわからない。ただ相も変らぬ芸なし猿、天才的な平凡児として持って生まれた天性を、あたり憚らず発揮しつくしながら悠々たる好々爺として、今日まで生き残って御座る。老幼賢愚の隔意なく胸襟を開いて平々凡々に茶を啜り、談笑して御座る。そこが筆者の眼に古今無双の奇人兼快人と見えたのだから仕方がない。世間の所謂快人傑士がその足下にも寄り付けない奇行快動ぶりに、測り知られぬ平々凡々な先生の人間性の偉大さを感じて、この八十幾歳の好々爺が心から好きになってしまったのだから致し方がない。そうして是非とも現代のハイカラ諸君に、このお爺さんを紹介して、諸君の神経衰弱を一挙に吹飛ばしてみたくなったのだから止むを得ない。

元来、頭山先生が、この「新青年」に、きょうが日まで顔を出さないのが間違っている。それも頭山先生が時代遅れのせいではない。かえって「新青年」誌の方が頭山老人の思想よりも立ち遅れている事を筆者は確信しているのだから是非もない。ここに先生の許しを得て、逸話を御披露する。

頭山満翁の逸話と言ったら恐らく、浜の真砂の数限りもあるまい。頭山満翁はさながらに逸話を作りに生まれて来たようなもので、その奇行快動ぶりと言ったら天下周知の事実と言っても憚らない位である。

しかし仔細に点検して来ると、その鬼神も端倪すべからざる痛快的逸話の中にも牢乎として動かすべからざる翁一流の信念、天性の一貫しているところを明白に認める事が出来る。

すなわち翁の行動には智力を用いた形跡がない。何でも行きなりバッタリの無造作、無鉄砲を以て押通して行く処に、翁の真面目が溢るるばかりに流露している。そうしてその真面目が、日常茶飯事に対しては意表に出ずる逸話となり、国事に触れては鉄壁を砕く狂瀾怒濤となって行くもののようである。

蛇は寸にして蛇を呑む。翁が十歳ばかりの年の冬に家人から十銭玉を一個握らせられて、蒟蒻買いに遣られた。その頃の蒟蒻は一個二厘、三厘の時代であったから、定めし十個か二十個買って来いと言う家人の注文であったろう。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ところが十幾歳の頭山満は蒟蒻屋の店先に立つと黙って十銭玉を一個投出したので、店の主人は驚いた。

「これだけミンナ蒟蒻をば買いなさるとな」

翁は簡単にうなずいた。

蒟蒻屋の主人は蒟蒻を山のように数えて、翁の前に持って来た。

「容れ物をば出しなさい」

翁はやはりだまって襟元を寛げた。ここへ入れよと言う風に、うつむいて見せた。そうして主人が驚いて見ているうちに、氷よりも冷たい蒟蒻の山を懐中に掴み込んで、悠悠と家へ帰った。

頭山翁は終生をこの無造作と放胆振りでもって押通している。

「俺は無器用な奴じゃがのう。しかし、その無器用な御蔭で、天下の形勢の図星だけは見外さぬようになっとる」云々。

「しかしこの頃俺に書画、骨董や、刀剣の鑑定を持込んで来るには閉口しとる。一番わからぬ奴の処へ見せに来る訳じゃからの。ハハハハ」

グロの方ではコンナ傑作がある。

大阪に菊地なにがしと言う市長がいたことがある。なかなかの遣手でシッカリ者と言う評判であったが、これに頭山先生が、何かの用を頼むべく会いに行った事がある。同伴者は先生の親友で、後の玄洋社長の進藤喜平太氏であったと言うが、市長官舎の応接室に通されて待てども待てども菊地市長が現われて来ない。天下の豪傑、頭山満が来たと言うので、才物の菊地市長尊大ぶって、羽根づくろいをするために待たせたものらしいと言う後人の下馬評である。

ちょうどその時に頭山先生は、腹の中でサナダ虫を湧かして、下剤を飲んでいたので、そいつが利いたと見えて待っているうちに尻の穴がムズムズして来た。そこで頭山先生懐中から股倉へ手を突込んで探ってみると、何かしら柔らかいものがブラリと下っている。抓んで引っぱってみると、すぐにプツリと切れてしまった。股倉から手を出してみるといかにも名前の通りに白い平べったい、サナダ紐みたいなものが一寸ばかりブラブラしている。

見ると目の前に、見事な金蒔絵をした桐の丸胴の火鉢があったので、頭山先生その丸胴の縁に件のサナダ虫を横たえた。進藤喜平太氏も不審に思って覗いてみたが、何やらわからないので知らん顔をしていたと言う。

そのうちに又、頭山先生のお尻の穴がムズムズして来たので、又手を突っ込んで引っぱると、今度は二寸ばかりの奴が切れ離れて来たヤツを、やはり眼の前の火鉢の縁へ、前の一片と並べて置いた。察するに頭山先生いい退屈凌ぎを見付けた積りであったろう。悠々と股倉へ手を突っ込んでは一寸、又二寸とサナダ虫の断片を取出して、火鉢の縁へ並べ始めた。

誰でも知っている通りサナダ虫は一丈も二丈もある上に、

短い節々のつながりが非常に切れ易いので、全部を引出し終るにはナカナカ時間がかかる。とうとう火鉢の周囲へ二まわり半ほど並べた処へ、やっとの事、御大将の菊地市長が出て来た。黒羽二重五つ紋に仙台平か何かの風采堂々と、二人を眼下に見下して、

「ヤア。お待たせしました」

と言いながら真正面の座布団に坐り込んだが、火鉢の縁へ手を載せたトタンにヒイヤリとしたので、ちょっと驚いたらしく掌を見ると、白い柔らかい、平べったい、豆腐の破片みたようなものが手の平へ二、三枚ヘバリ付いている。嗅いでみると異様なたまらない臭いがする。菊地市長いよいよ驚いたらしく背後をかえりみて女中を呼んだ。

「オイオイ。この火鉢の縁の……コ……コレは何だ」

女中が真青に面喰らった。ちょっと見た処、正体がわからないし、自分が並べたおぼえがないので、返事に窮していると、頭山先生が静かに口を開いた。

「それは僕の尻から出たサナダ虫をば並べたとたい」

菊地市長は「ウワアッ」と叫んで襖の蔭に転がり込んで行ったが、それっ切り出て来なかった。

二人は仕方なしに市長官舎を辞したが、門を出ると間もなく正直者の進藤喜平太氏が、

「折角会えたのに惜しい事をした」

とつぶやいた。頭山先生は又も股倉へ手を突っ込みながら、

「フフン。あいつは話らん奴じゃ」

まだある。

これは少々グロを通り越しているが、頭山翁の真面目を百パーセントに発揮している話だから紹介する。頭山翁が玄洋社を提げて、筑豊の炭田の争奪戦をやらせている頃、福岡随一の大料理屋常盤館で、偶然にも玄洋社壮士連の大宴会と、反対派の壮士連の大宴会が、大広間の襖一枚を隔ててぶつかり合った。

何がさて明治もまだ中途半端頃の血腥い時代の事とて、何か一と騒動始まらねばよいがと、仲居、芸妓連中が心も空にサービスをやっているうちに果せる哉始まった。

合の隔ての襖が一斉に、どちらからともなく蹴開かれて、敷居越しに白刃が入り乱れ、遂には二つの大広間をブッ通した大殺陣が展開されて行った。

大広間に置き並べられた百匁蠟燭の燭台が、次から次にブッ倒れて行った。

そうして最後に、床の間の正面に端座している頭山満の左右に並んだ二つの燭台だけが消え残っていた。これは広間一面に血の雨を降らせ合っている殺陣連中が、敵も味方も目が眩んでいながらに、そうした頭山満の端然たる威風に近づくとハッと気が付いて遠ざかったからであった。

その頭山満の左右と背後の安全地帯に逃げ損ねた芸者仲居が、小さくなって固まり合って、生きた空もなくなって

いた。しかし頭山翁は格別変った気色もなく、活動のスクリーンでも見てるような態度で、眼の前の殺陣を眺めまわしていたが、そのうちにフト自分の傍に一人の舞妓がヒレ伏しているのに気が付くと、片手でその背中を撫でながら耳に口を寄せた。

「オイ。今夜俺と一緒に寝るか」

これは頭山翁お気に入りの仲居、筑紫お常婆さんの実話である。この婆さんも又、一通りならぬ変り物で、ミジンも作り飾りのない性格であったから、機会があったら別に紹介したいと思う。

この婆さんが黙って死んだのでホッと安心して御座る北九州の名士諸君が多い事と思うが、しかしまだまだ御安心が出来ませぬぞ。この婆さんから筆者がドンナ話を聞いているか知れたものではないのだから……。

頭山翁のノンセンス振りと来たら又一段と非凡離れがしている。つまる処は聖人以外の誰にでも出来る平々凡々振りであるが、その平々凡々振りが又なかなか容易に真似られないのだから不思議である。頭山翁の恐ろしさと偉大さは、その平々凡々なノンセンス振りの中に在ると言ってもいい位である。

嘗て頭山翁が持っていた、北海道の某炭坑が七十五万円で売れた事がある。

これを聞いた全日本の頭山翁の崇拝者連中、喜ぶまいことか、吾も吾もと押寄せて、当時霊南坂にあったかの頭山邸は夜も昼も押すな押すなの満員状態を呈した。下では幾流れとなく板を並べた上に食器を並べて、避難民式に雲集した書生や壮士が入れ代り立ち代り飯を喰うので毎日毎日戦争のような騒動である。また階上の翁の部屋では天下のインチキ名士連が翁を取巻いて借銭の後始末、寄付、運動費、記念碑建立、社会事業、満蒙問題なぞ、あらゆる鹿爪らしい問題を提げて、厚顔無恥に翁へ持ちかける。

翁はそんな連中に対して面会謝絶をしないのみか、どんな事を頼まれても否とは言わない。黙々として話を聞き終ると金ならば金、印形なら印形を捺してやってミジンも躊躇しない。市役所へハキダメの物でも渡すように瞬く間に七十五万円を消費してしまった。残るものは借金取りの催促と、雲集した書生壮士ばかりになってしまった。

それでも、まだ印形や金を借りに来るものがある。しかも以前に、二度と来られないようなインチキで翁を引っかけて行った人間が、シャアシャアと又遣って来るのである。それでも翁は何も言わずに無理算段をした金を遣り、印形を貸す。翁の一家は、そのために、七十五万円の富豪から一躍、明日の米もない窮迫に陥ってしまったが、それでも避難民張りの米喰虫は雲集するばかり……。

或る人が見兼ねて、

「これはイカン。何とかしてコンナ恥知らずの連中を逐い出さねば、先生の御一家は野タレ死にをしますぞ」

と忠告した。翁はニコニコと笑って疎髯を撫でた。
「まあそう、急いで逐い出さんでもええ。喰う物がなくなったら何処かへ行くじゃろ」

今一つノンセンス。翁と同郷の福岡に的野半助と言う愉快な代議士君がいた。（別人とも聞いているが）この代議士君……頭山先生は人物が出来とるから禅学を遣ったらキット成功する……と言うので翁を掴まえ、禅学を説き立てた。翁は黙ってウンウンとうなずきながら聞いていたが、とうとうこの愉快な代議士君に引っぱり出されて鎌倉の円覚寺に釈宗演和尚を訪う事になった。

釈宗演和尚は人も知る禅風練達の英僧、且つ雄弁家で的野代議士の崇拝の的であった。さるほどに宗演老師は天下の豪傑頭山翁の来訪を喜んで、禅学に就いて弁ずる事良久。徐ろに翁に問うて曰く、
「あんたは前にも禅学を志された事がありますかな」
翁曰く、
「ウム。在る。しかし素人じゃ」
「ハハア。誰に就いて御修業なされましたかな」
翁、傍に小さくなっている背広服の的野代議士をかえりみて、
「ナニ。コイツに習うただけじゃ」
釈宗演和尚唖然。

ツイこの間新聞を賑わした法政大学の騒動の時、教授の一人である山崎楽堂氏が喜多文子五段の紹介か何かで単身、頭山翁を渋谷の自宅に訪問した。山崎楽堂氏は現代能評界に於ける一方の大御所で、単純率直、達弁の士である。

湯から上って来た頭山翁は、翁の居間にチョコンと坐っている楽堂君を見ると突っ立ったまま言った。
「君一人か」
「ハイ」
と答えつつ楽堂君は簡単に一礼した。翁はこの時既に法政騒動の成行と、楽堂氏の性格に関する概念を掴んでいたらしい事を、この簡単な問答の中から推測し得べき理由がある。

それから楽堂君が持って生まれた快弁熱語を以て滔々と法政騒動の真相を披瀝すると、黙々として聞いていた翁は、やがて膝の前に拡げられた法政騒動渦中の諸教授の連名に眼を落した。
「ウーム。あんまり複雑で、ワシにはよくわからんがのう。この教授の中で正しい事を主張しよる奴の頭の上に丸を付けてくれんか」

楽堂君ちょっと呆れたが命令通りに自分の味方の諸教授連の頭の上に丸を付けて見せると、翁はニコニコと笑顔を見せた。
「フーム。正しい奴の方が、不正な奴よりもズット多いじゃないか」

「ハイ」

翁はマジマジと楽堂君の顔を見た。

「フフ。意気地がないのう。人数の多い方が負けよるのか」

楽堂君は返事に窮した。こう端的に子供アシライにされようとは思わなかったので眼をパチパチさせていると、翁はいっそうニコニコし出した。

「ウムウム。まあええから、そげな騒動しよる連中を皆一緒にここへ連れて来なさい。わしが聞き役になって遣るけに、両方で議論してみなさい。わしが正しい方に加勢してやる」

山崎楽堂氏は大喜びで帰ってこの旨を全教授に通告した。しかしせっかくの翁の心入れも、楽堂氏と反対側の諸教授の不出席によってオジャンとなったと言う。法政騒動裏面史の一席……。

どうしてコンナ巨大な平凡児が日本に出現したかという……つまり頭山満の立志伝を書けと言われると筆者も少々困る。頭山満翁には、元来立志伝なるものがない。古往今来、あらゆる英雄豪傑は皆、豪い者になろうと志を立ててから、その志に向って勇往邁進したに相違ない。つまるところ志を立てなければ豪い者になれない訳であるが、頭山翁の生涯を見ると、その志なるものを立てた形跡がない。従ってその立志伝なるものの書きようがないから困るのだ。

勿論、頭山翁は若い時代に、維新後の日本が西洋文化に心酔した結果、日に月に唯物的に腐敗堕落して行く状況を見て、これではいけないぐらいの事は考えたかも知れないが、それを救うためには自分が先ず大人物にならなければとか、実社会に有力な人物にならなければとか、又は大衆の人気を集めなければとか、人格者として尊敬されなければ……とか言ったようなセセコマしい志を立てた形跡はミジンもない。持って生まれた平々凡々式で、万事ありのまんまの手掴みで片付けて来ている。そこが頭山翁の古来ありふれた人傑と違っている点で、その平々凡々式の行き方が又、筆者をして頭山翁を好きにならしめた第一の条件になっているらしいのだ。

事実、頭山翁を平凡人なりと断定されて腹を立てる取巻きの非凡人諸君の中には、頭山翁が超特級の非凡人でなければ差支える連中が多いようである。頭山翁の爪の垢を煎じて第一に服ませて遣りたい人間は、頭山翁を取巻くそんな非凡人諸君に外ならないのだ。

維新後、天下の大勢を牛耳って、新政府の政治と、新興日本の利権とを併せて壟断(うだん)しようと試みた者は、所謂、薩長土肥の藩閥諸公であった。その藩閥政治の弊害を打破るべく今の議会政治が提唱され始めたものであるが、そもそもその薩長土肥の諸藩士が王政維新、倒幕の時運に参劃し、天下の形勢を定めた中に、九州の大藩筑前の黒田藩ばかりが何故に除外されて来たのか。筑前藩には人物がいなかっ

たのか。もしくはいるとしても、天下を憂い、国を想う志士の気骨が筑前人には欠けていたのかと言うと、ナカナカそうでない。事実はその正反対で、恐らく日本広しと雖も北九州の青年ほど天性、国家社会を患うる気風を持っている者はあるまいと思われる。そうした事実は、明治、大正、昭和の歴史に出て来る暗殺犯人が大抵、福岡県人である実例を見ても容易に首肯出来るであろう。

維新前の黒田藩には、西郷南洲、高杉晋作に比肩すべき大人物がジャンジャンいた。さすがの薩州も一時は筑前藩の鼻息ばかりを窺っていた位である。有名な野村望東尼を仲介として西郷、高杉の諸豪は勿論、その他の各藩の英傑が盛んに筑前藩と交渉した形勢は、筆者の幼少の時に屢々、祖父母から語って聞かされた事である。但しそれ等筑前藩の諸英傑が、何故に維新以後、音も香もなくこの地上から消え失せてしまったかという、その根元の理由に考え及ぶと、筆者も筆を投じて暗然たらざるを得ないものがある。

筆者の祖先は代々黒田藩の禄を喰んでいた者だから黒田様の事はあまり言いたくない。しかし何故に維新後に筑前閥が出来なかったか……と言う真相を明らかにするためには、どうしても左の二つの事実を挙げなければならぬ事を遺憾とする。

一、当時の藩公が優柔不断であった事。

二、黒田藩士が上下を問わず人情に篤く、従って藩公に対する忠志が、他藩の藩士以上に潔白であった事。

ところでここで今一つ、了解して置いて貰わねばならぬ事は、昔の各藩の藩士が日本の国体を知らなかった……換言すれば昔の武士というものは、自分の藩主以外に主君というものは認識していなかった事である。

これは誠に怪しからん事で、今の人には到底考えられない。同時にあまり知られていない大きな事実で、時節柄、御同様まことに不愉快な史実でもあり得るのであるが、しかしこの史実を認識しないで明治維新の歴史を読んでいると飛んでもない錯覚に陥る事がある。すくなくとも王政維新なる標語を各藩に徹底させるのが、どうしてあんなに骨が折れたのかと不思議の感に打たれるので、黒田藩では特にこうした傾向が甚しかった事が窺われるようである。

そこへ藩公が優柔不断と来ているからたまらない。佐幕派が盛んになると勤王派の全部に腹を切らせる。そのうちに勤王派が盛り返すと今度は佐幕派の全部を誅戮する。そうすると藩士が又、揃いも揃った正直者ばかりで、逃げも隠れもせずにハイハイと腹を切る……と言った調子で、最初から一方にきめて置けばどちらかの人物の半分だけは救われたろうに、藩論が変るごとに行き戻りに引っかかってバタバタと死んで行ったのだからたまらない。とうとう黒田藩の眼星しい人物は、殆ど一人もいなくなってしまった。たまたま脱藩して生野の銀山で旗を挙げた平野次郎ぐらいが目っけもの……という情ない状態に陥った。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com